

歴史とコミュニティの継承

新川千本桜の会

新川の整備に合わせ、新川を歴史的な財産・名所として蘇らせ、世代を超えて守り、育て、次世代へと引き継ぐために、地元町会・自治会が中心となり新川千本桜の会が設立されました。広く募金を呼びかけ、8,650万円余りの浄財が集まり、桜の植栽の費用の一部に充てられました。

新川千本桜まつり

桜の花が見頃を迎える時期に、新川千本桜の拠点である新川さくら館と新川沿川を会場に新川千本桜の会の主催により江戸の風情の中で桜を楽しむイベントとして「新川千本桜まつり」が開催されます。



新川さくら館前の催し物



桜橋上の模擬店

和船の運航

千本桜の整備にあわせ、江戸の風情の演出と川からの景色を楽しめるように手漕ぎの和船が復活しました。

新川千本桜まつり期間中や、新川げんき会が新川さくら館前で定期的に開催しているあさ市に合わせ、江戸川遊漁船組合やNPO法人和船の会が協力し、和船が運航されています。



和船の運航



新川千本桜



●お問い合わせは

江戸川区 土木部 水とみどりの課 TEL:03-5662-0320

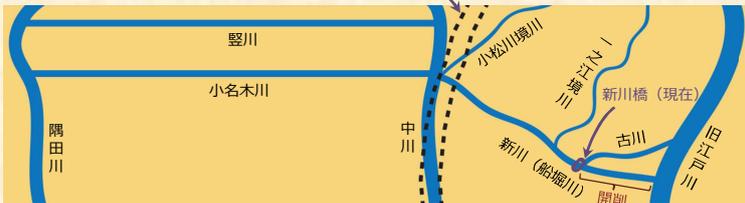
 江戸川区

新川今昔物語

新川のはじまり

かつて新川は船堀川ともよばれ、太日川（現在の旧江戸川）の河口近くで分かれた川です。徳川家康が江戸幕府を開き、行徳に産する塩を江戸に運ぶため、寛永六年（1629）に現在の新川橋付近から東へ直線の新しい水路を掘りました。この新しい水路部分を「新川」と、今までの流れを「古川」と呼び、いつのころからか船堀川全体を「新川」と呼ぶようになりました。

中川・荒川（現在）



江戸の繁栄を支えた新川

天正18年（1590）、徳川家康は拠点となる江戸を水害から守るため、当時江戸湾へ注いでいた利根川の流れを変える「瀬替え」を命じます。これが、利根川東遷とよばれる大事業です。新川の開削も、この事業の一環として進められました。やがて利根川の東遷によって「利根川～江戸川～新川～小名木川」のルートが完成し、新川は行徳の塩を運ぶだけでなく、北関東や東北から物資を運ぶルートとして重要な役割を担うようになりました。

市民の足を担った新川の定期航路

明治4年（1871）、深川万年橋に利根丸会社が作られ、新川から栗橋（埼玉）をつなぐ蒸気船「利根丸」が就航しました。明治10年（1877）には内国通運会社の「通運丸」が就航し、ルートを妻沼まで伸ばします。大正8年（1919）には東京汽船株式会社が高橋から行徳に至る定期船を就航させます。その後まもなく葛飾汽船会社も高橋と浦安の間に定期船「葛飾丸」を就航させ、そのエンジン音から「ボンボン船」と呼ばれ、通学や行商の足として地域の人々に親しまれてきました。やがて江戸川や中川に橋が架けられ、陸上交通が整備されると次第に輸送は陸上へと移り、昭和19年の通船廃止をもって輸送路としての新川に終止符が打たれました。



ボンボン船

新川千本桜の歩み

江戸時代から続く新川（旧船堀川）は、行徳の塩を運ぶ『塩の道』として整備され、地方から江戸への物資の運搬ルートとして江戸の生活を支えてきました。やがて、物資だけではなく定期運行された船で人々の往來を支え、庶民の生活に欠かせない存在でした。

その後、通船の廃止や地盤沈下に伴うコンクリート護岸のかさ上げにより、新川が人々の生活から遠ざかってしまいました。そこで、都市の貴重な水辺空間である新川を蘇らせて、より多くの人々に楽しんでいただくため、江戸情緒のある魅力あふれる環境整備を行いました。

新川千本桜計画

新川の全長3kmの両岸に桜を植え、新しい名所とするとともに、川の南北地域の心の和が一層広がるよう人道橋並びに広場橋を架けるなど、次世代に地域の歴史や文化を継承する空間を創出しています。



施工前



施工後

水門の閉鎖と耐震護岸整備

東京都は、昭和51年に新川の東西水門を閉鎖した上で東の旧江戸川から取水し、西の排水機場から中川に排水することで水質維持を図り、新川の水位を調整するようにしました。

また、平成6年から護岸の耐震化が進められ、江戸川区も協力し平成25年度に全川が完了しました。これらにより、以前、地域の人々と新川を隔ててきたコンクリートの護岸が撤去され、遊歩道を整備したことで身近に水辺が親しめるようになりました。



施工前



施工後

新川散策 新名所図会

新川沿川には、20種類の桜が植栽されています。
ソメイヨシノ・エドヒガン・シダレザクラ・アマノガワ・オオシマザクラ・・・など



①新川西水門広場

新川千本桜の起点として整備され、敷地には広場のほか洗手所や新川千本桜のモニュメントとなる高さ15.5メートルの火の見やぐらがあります。



⑤船堀グリーンロード

都営新宿線「船堀」駅と交差する船堀街道に接した全長約1,500メートルの緑あふれる遊歩道です。「グリーンロード」という名のとおり、沿道にはソメイヨシノ・キンモクセイ・ツツジなど四季折々の樹木が数多く植えられており、季節ごとに様々な表情で訪れる人々を楽しませます。



⑨新川さくら館

新川さくら館は、新川の歴史を後世に伝えるとともに、お休み処や広場などを活用したイベントの開催により、新川を訪れる人々との交流を図る地域の拠点となる施設です。また、集会室や多目的ホールを備え、文化活動や軽運動などにもご利用いただけます。



⑫花見橋

環状七号線の東側に架かっている広場橋です。新川の東ゾーンの象徴として、橋のたもとの「橋詰」をイメージとし、橋詰の賑わいを思い起こさせる空間として架橋しました。



⑭新川口児童遊園

新川を埋め立て旧江戸川から取水するための樋門を整備した箇所の上利用した公園です。新川両岸の遊歩道が公園でつながっています。また、園内にはケヤキのシンボル樹が植栽され、新川梨の案内板も設置されています。



②修景土塀

新川千本桜計画に伴う親水護岸整備、桜の植栽等を行って、沿川の新川周辺景観づくりへの協力・理解を求めています。平成21年度の西水門広場の完成にあたり、周辺景観向上の一環として、第一三共株式会社様からの御寄附をもとに、既存の壁を生かしながら江戸の景観を模した壁を設置しました。

③櫓橋

新川の最西端にある人道橋です。江戸時代風のシンプルなデザイン、高欄の形式が特徴です。橋脚を持ちつ新川唯一の橋で、橋脚は石張りづくりとなっています。

④擬宝珠橋

新川休養公園と対岸を結ぶ人道橋です。日本古来の有名な木橋に用いられている擬宝珠（ぎぼし）付きの高欄を採用しています。擬宝珠とは、親柱などにつけられた玉ねぎのような形をした飾りのことです。

⑥忍者橋

新渡橋の西側、船堀幼稚園の前に架かっています。黒色の特徴的な人道橋です。桁隠しの小庇を設けた木屋根構造により江戸の風情を演出しています。

⑦小江戸橋

新渡橋の東側に架かる人道橋です。桁に化粧張りをしており、江戸情緒漂う橋となっております。この辺りは早くに桜の植栽をしており、開花時の橋からの眺めは見事です。

⑧桜橋

桜橋は三角橋の西側に架かっている広場橋です。地域交流の拠点新川さくら館とともに、新川の中央ゾーンの象徴として、橋のたもとの「橋詰」をイメージとし、橋詰の賑わいを思い起こさせる空間として架橋しました。

⑩千本桜記念碑

平成19年11月、葛西地域では新川千本桜に賛同した方々により「新川千本桜の会」が結成されました。自らの手で千本桜を実現するためにワンコイン募金等の活動により、多くの皆様から多大なる寄付を頂きました。その温かい思いに敬意を表して新川護岸遊歩道に寄付者の名前を刻んだ「新川千本桜記念碑」を建立しました。

⑪新川橋

初代新川橋は大正5年、本区初の鉄橋として架橋され、現在の橋は三代目になります。新川千本桜に映えるように江戸情緒を醸し出す木製の欄干を設置しました。橋の両端4か所の木製の親柱には、橋の北側と南側にある中学校の生徒が揮毫した橋名が鋳物で取り付けられました。

⑬宝橋

新川の最東端にある人道橋です。川に張り出した石張りの橋台が特徴です。大きな擬宝珠(ぎぼし)が江戸の風情を演出しています。通学路として利用している二之江第三小学校の児童から橋名を募集し、新川千本桜と子どもたちは地域の「宝」という想いを込めて決定しました。

- 最寄駅からの交通アクセス
- 船堀駅：徒歩5分
 - 一之江駅：バス（新小29、新小29-2、臨海28甲、小76・第2南小岩線、環七シャトル）「古川親水公園」下車、徒歩4分
 - 西葛西駅：バス（新小21、臨海22）「船堀小学校」下車、徒歩3分
 - 葛西駅：バス（新小22、新小29、新小29-2、臨海28甲、小76・第2南小岩線）「桑川町」下車、徒歩3分
 - バス（錦25、平23）「新川橋」下車、徒歩1分
- 凡例：📍バス停留所